



口減少に伴う地方の衰退によって、運営することや参加することが困難になってきている。行政としてどんな支援ができるか伺う。

**答弁**

集落や町内会・自治会、実行委員会が実施する地域の特色ある自主事業に対して補助金を交付している。

例えば「元気の出る地域づくり事業」や「地区会議支援事業」では、増田地域の「三世代交流事業」、大森地域の「地域おこし支援事業」など市内各集落や町内会からの伝統行事活動の要望に応じた補助金交付による支援を行っている。

**質問**

様々な事例を挙げられた。こういう事をしていくから、それでいい、という考え方だと思いが、私はそうは思わない。個別で支援しているが、目的は一緒である。そしてまだまだ支援してほしい、手を挙げたいというところがたくさんあると思う。市が本気で「おまつりを守りたい」と思うならば、補助金枠を拡大し、統一した支援事業にすべきだ。

**答弁**

おまつりは各地域の風土や、集落の様々な文化から湧き起こった伝統であり、生活の中でなくてはならないものだったと思う。ただ、それをそこに住む方々が「理解」するというのが大事。それなくして上意下達のように市が「やりなさい」というものではない。まずは、おまつりの意義を伝えていくことが不可欠だ。

**質問**

私は、市が「やりなさい」と言え、とは言っていない。「手を挙げて下さい」という環境になればいいですね、と言っている。そこは誤解のないように。市長の言っている「理解」や「伝える」ことはごもっともだ。しかし、それは将

来的な視点でみた場合だ。今、こうして議論している間にどこかの集落や町内会・自治会で「もうこのおまつりはやめた方がいいのではないか」と話をして、決断をしているところがあるかもしれない。そういう現実、「今」の部分も重視していくのが政治の役割ではないか。

**答弁**

ご提案は検討の余地があると思うが、補助金がなくなると消滅するイベントもあるという事を考えると難しい。

**質問**

先程までの質問は「おまつりを運営することを念頭に話しをしたが、「おまつりに参加する」という部分でも悩ましい。例えば旭岡山神社の小若ぼんでんに参加する町内会の親子会も財源が厳しい。突き詰めると、町内会・自治会の運営自体が苦しいということにつながっていく。3月定例会で加藤勝義議員が「資金的な支援ができないか」と提案されたが、その後どうなっているのか？

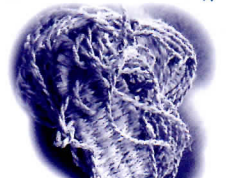
**答弁**

なかなか難しいと考えている。集落の維持は重い課題だ。検討していくので今しばらく時間がほしい。

**「わら文化」に代表されるおまつり・伝統行事に必要な「技」の継承について**

**質問**

例えば「しべ」がないとぼんでん文化は成立しない。しかし、その「しべ」を作る職人が減っており、確保が課題となってきた。おまつり文化が



ぼんでん文化に必要な「しべ」

途絶えなため「技」の継承についてどう考えているのか？

**答弁**

「わら文化」は貴重な先人の知恵だ。多くの地区公民館で実施している世代間交流事業で子どもたちが技術に積極的に関わることで、伝統と地域を愛する心を継承していけると思う。この動きを全体的に展開できるよう、情報共有を図る。

**後方支援拠点を兼ねたアリーナ建設について市長の決意と覚悟を問う**

**質問**

市長は所信説明の冒頭で「今後のまちづくりの核となる事業のひとつとして、防災機能を備えた大型の多機能型体育館の建設を考えている」と正式に表明された。その必要性は私も共有するものだ。現時点での計画(時期・規模・事業費(財源))は？

**答弁**

現時点では計画の骨子をまとめていく状況で、具体的な建設時期や財源は検討中だ。機能と規模はスポーツのみならず文化的な興行についての可能性も視野に入れている。事業費も規模と機能を勘案して積算していく。構想レベルの段階ではつきりした内容、数値を申し上げられないところが心苦しいが、市民の皆様、議会と意見交換しながら検討していく。

**質問**

所信説明の冒頭で話された割には具体的なものが一切ないとはどういうことか。興行のライバルは全国だ。こういった大会、合宿、イベント、コンベンション

を誘致したいというものが市長の中にあるはずだ。一つ、二つ挙げてほしい。

**答弁**

固唾を飲んで横手市の動きを注視している自治体もある(だから、言えない)。ずつと言わないのは許されないし、無計画で進んでいくわけではないが、しっかりと検討しながら提案をしたい。

**質問**

ライバル対策という事だが、おぼろげながらも言わないと市民はイメージがわかないと思う。それに、「手を挙げたもの勝ち」という場合もある。

**答弁**

今も行っているバレーボールのわか杉カップや、先日の全日本男子バレーボールチーム、そしてプロバスケットボールの地元チームの誘致はしっかりとやっていきたい。もちろん、全国大会も視野に入れていく。

**質問**

財源を含めた建設のあり方について、ライフサイクルコストを意識した民間の力を活用した方式を提案したい。岩手県紫波町の「オガール」という拠点は公民連携方式で建設され、黒字だ。バレーボール専用の体育館、ホテル、図書館、カフェ、産直といったアリーナとは内容も規模も違うものだが、「テナントを決め、そこから規模や建設額を積算し」事業を進めた。要するに稼働率100%。まともな税金の使い方だ。ぜひ、この方式で進めてほしい。

**答弁**

全国的にも注目されている取り組みですばらしい成功事例だと思っております。ランニングコストを下げ、収益を上げていくことが大事。しっかりと参考にして、検討を進める。

